

# サンダカンに行ってきました

日本人会事務局員 両頭真衣

ジョホール日本人会油井美穂子事務局長から「サンダカンに行くことになりました。良かったら一緒に行きませんか」とお誘いいただき、2026年4月、サンダカン(マレーシア・サバ州)に行ってきました。

サンダカンといえばシンガポールと同様に「からゆきさん」たちが渡った場所で、山崎朋子さんのノンフィクション『サンダカン八番娼館』、またそれを実写化した映画『望郷』で知られています。



画像上、右地図: Google Mapsを使用

サンダカンは、かつて北ボルネオの中心地として栄えた港町です。1880年代に行政拠点がサンダカンに移され、第二次世界大戦後に首都機能がジェッセルトン(現在のコタキナバル)に移るまでは、英領北ボルネオの行政中心地でした。現在はマレーシア・サバ州に属し、豊かな熱帯雨林と海に囲まれた自然の玄関口であるサンダカンは、同時に歴史の記憶を今に伝える静かな街でもあります。

明治・大正期には、日本への南洋材(ラワン材や黒檀、チーク)の輸出基地で、多くの日本人が暮らしていました。1930年代には、世界最大の南洋材輸出港であったそうです。日本人も多く移住し、日本人街が形成され、数百人規模のからゆきさんが渡ったと言われています。

娼館主が日本人墓地を建て、からゆきさんたちのお墓も百基ほどあったそうですが、戦後はジャングルに埋もれていました。『サンダカン八番娼館』の発行により墓地の存在が知られ、商社の駐在員が現地の人に話を聞き、週末にカマを持ってジャングルの草木を切り開き、日本人墓地を発見しました。その後は現地の日本人会が墓地の管理をしていたのですが、環境破壊や森林資源の枯渇が問題になるにつれて貿易量が減少



サンダカン八番娼館跡

し、日系企業も減り、新型コロナウイルス(COVID-19)流行後は墓地を訪れる人も少なくなっているようです。

シンガポール日本人墓地公園を担当し、からゆきさんのお墓を管理している筆者も、いつかはサンダカンの日本人墓地を訪ねてみたいと思っていたので、油井事務局長に同行させていただくことにしました。

サンダカン探検隊は現地集合・現地解散で、メンバーは、日本から来た島田潤隊長、ジョホールバルから油井美穂子事務局長、シンガポールからは在住者の本田智津絵さん、近藤明日香さん、そして筆者の5人となりました。海辺の市街地中心部にあるホテルサンダカンに宿泊しました。

八番娼館は戦前の日本人街の一角にあったとされ、ホテルサンダカンから歩いてすぐの場所にあります。ホテルにチェックインした初日に、油井事務局長と筆者でまずは八番娼館跡を見に行きました。娼館だった当時は木造の2階建てだったようですが、現在はビルに建て替わっています。八番娼館だった場所には薬局が入っていますが、私たちが滞在中に開いている様子を見ることはできませんでした。

日本人墓地へは、探検隊メンバーが全員揃った日に訪ねました。ホテルサンダカンの近くに、ヘリテージトレイルの一つになっている百段階段があり、そこを昇ると日本人墓地に向かうことができますが、地図を見ても正確なルートが見つけれなかったため、まずは配車タクシーで日本人墓地に一番近付ける場所まで行きました。本田さんは20年前に親子二人でここを訪れたことがあったそうですが、日本人墓地に続く道を見つけれなかったようで、二度目の探検でした。



日本人墓地への道

山の斜面に建つ中国人墓地が左手に見える所まではタクシーで行くことができ、そこから歩いて進みました。フェンスで囲まれた場所があり、門が開いていたので中に入ってみたところ古い墓石や階段があったので、草むらをかきわけて歩きました。しかしオンラインの地図が示す日本人墓地に続く道は見つけることができず、引き返したところ、古いヒンズー教墓地の火葬場であった看板を見つけました。



旧ヒンズー教墓地の火葬場



日本人墓地への道

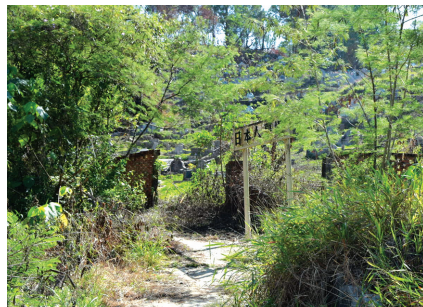
ヒンズー教墓地の火葬場に入る前に、フェンスの横に細い道があることには気付いていましたが、10mほど先で行き止まりになっていました。日本人墓地へ行く道が見つけれないと諦めかけたところ、もう一度その細い道を歩いて、アスファルトの道が終わった先に、けもの道が見えました。タクシーを降りてからここまで、周囲にはまったく人がおらず、見渡す限り誰も歩く人はいませんでした。少人数では不安になるような道でしたが、男

女5人グループなら大丈夫ではないかと、藪の草木をかきわけながら、けもの道を進んだところ、鬱蒼とした中国人墓地の中に、日本人墓地と書かれた門を発見しました。草むらを歩き、藪を抜けて、この門を見つけた時の安堵と感激は、一生忘れられないものになりそうです。



日本人墓地へ続く  
けもの道

門をくぐった先もまだけもの道が続く、古い階段で山を登りました。そして草むらの中に、日本人の墓を発見したのです。墓石に、「故仲松和江之墓」の文字が読めました。その奥にも墓石が続き、日本語が書いてありましたが、おそらく最近ローカルの方によってペンキでなぞられたような文字が見えました。



日本人墓地の門



日本人墓地への階段



海を見下ろす日本人墓地



木下クニの墓



木下クニが建てた無縁仏



日本人墓地の門



故仲松和江之墓

「南十字星礎眠」(南十字星の下、この地の礎を築いた人々が眠る)の碑文は東南アジアで暮らす私たちの心に響くもので、先人の功績に感謝をしながら手を合わせ、美しい海を見下ろすように建つ日本人墓地を後にしました。



南十字星礎眠と彫られた碑

日本人墓地から30分ほど歩いたところにあるイングリッシュ・ティーハウスで休憩し、その隣にあるアグネス・キースの家を見学しました。こちらは英領北ボルネオ勅許会社の任命でボルネオの役所にて森林管理官兼農業局長、国立美術館名誉館長、猟区管理官などを勤めた夫ハリー・キースに付いて1934年にこの地にやってきたアメリカ人作家アグネス・キースが、息子のジョージと大勢のヘルパーと共に住んだ家でした。実際の家は戦時中に破壊されましたが、州政府機関によって復元され、2004年から博物館として公開されています。



日本人墓地内には、からゆきさんたちをはじめ、当地で亡くなった日本人の墓地が残されている

さらに続く階段を昇ると、からゆきさんたちの墓がありました。他に故雲南丸船長の墓や、1974年にセレベス湾業務中に遭難死去した方の墓石も並んでいました。ひときわ大きな「無縁法界之霊」と彫られた墓には、八番娼館の主で、からゆきさんたちのお世話をよくし、この墓地を建てた木下クニさんの名前を見つけることができました。少し離れたところにクニさんご本人の墓もありました。油井事務局長が持参されたお線香をお供えし、遠く日本を離れ、この地へ渡った先人たちのご冥福を祈りました。



イングリッシュティーハウス



アグネス・キースの家

戦前・戦後におけるこの建物の居住者の記録が展示されていました。戦後は森林局長の公邸となり、1968年以降は現地の役人や、日本の青年海外協力隊などのボランティアのため

の住居となり、日本人の名前もありました。1992年以降、居住者がいなくなった後はシロアリ被害や不法占拠により荒廃し、2001年にサバ州立博物館が連邦政府の支援を受けて修復したのだそうです。

帰りのサンダカン空港のお土産ショップで、アグネス・キースの著書「LAND BELOW THE WIND」の日本語版「風の下の方国」を見つけて購入しました。この家を見学した後に読むと、風景や情景が浮かびました。

1941年に日本軍が英領マラヤに侵攻し、1942年から日本軍によるサバ州の占領が始まった時、在留していた外国人は、男性だけでなく女性も子どもも全員捕虜収容所に収容され、終戦まで約3年半の過酷な生活を強いられていました。男性と、女性・子どもは別の収容所に入れられ、アグネスと息子ジョージはサバ州サンダカンから隣のサラワク州クチンへ送られました。その過酷な生活の様子を書いた本「THREE CAME HOME」(日本語版「三人は還った」)はアメリカでベストセラーになり、後に映画化もされています。日本ではあまり知られていない、東南アジアの占領下における民間人捕虜の記録です。

今回のサンダカン訪問中、4月25日に開催されたオーストラリア軍の慰霊祭アンザックデーにも参加しました。サンダカンの「死の行進」は1945年、北ボルネオに展開していた日本軍を西海岸アピへと集結させる移動命令に伴い、東海岸のサンダカン捕虜収容所に収容されていたオーストラリア・イギリス軍の捕虜が、260km離れた内陸のラナウへと移動することが命じられました。この移動により、捕虜2,434人のうち脱走した6人を除く2,428人が餓死や病死、銃殺などによって死亡、殺害されました。日本兵も一万人以上が移動し、半数近くが死亡しましたが、北ボルネオの民間人や地元住民にも被害が及び、オーストラリアの戦争史では最悪の悲劇、戦争犯罪とされています。



死の行進 SANDAKAN DEATH MARCH REMEMBRANCE WALL

慰霊祭は早朝5時に始まるため、4時にホテル近くからシャトルバスに乗り込み、会場となるサンダカン記念公園へ向かいました。公園の入口から慰霊碑会場までは、夜明け前の暗い中を列をなして歩きます。これは、ジャングルの暗闇を歩いた捕虜に気持ちを重ねる時間のように思いました。夜明け前に始まった慰霊祭では多くの人々のスピーチがあり、日が昇った頃にオーストラリア、ニュージーランド、マレーシアの国歌斉唱、最後に20名の遺族の皆さんの献花、参加者の献花で式典を終えました。このような機会にサンダカンを訪れることができ、日本人として客観的に歴史を知ることができました。シンガポールでも、4月25日は朝6時半からクランジ戦争記念公園で慰霊祭が行われていました。世界が戦争で揺れている今、私たちが改めて歴史を学び、次世代に伝えていく役割があるように思います。



Anzac Day 慰霊祭



慰霊碑

サンダカンの海辺にあるホテルTHE ELOPURAの壁には、「死の行進 SANDAKAN DEATH MARCH REMEMBRANCE WALL」と名付けられた壁画もありました。

せっかくなのでボルネオに行ったので、セピロックにも足を伸ばしました。オランウータン・リハビリテーションセンターでは、親子のオランウータンが遊具で遊び、フルーツや野菜を食べる様子を間近に見ることができました。ボルネオ・サンベアー・コンサベーションセンターでは、東南アジアに生息する世界最小のクマで、胸の黄色っぽい模様が太陽(SUN)のように見える「サンベアーSUN BEAR」を見ることができました。



オランウータン



サンベアー

サンダカンは広東系移民が多いため、マレーシアの中でも食事が美味しいと言われています。漁村に行き、名物のシーフード・バクテーを食べました。シンガポール名物のバクテーは豚スペアリブですが、こちらではシーフードを薬膳で煮込み、胡椒を効かせたスープでした。



シーフードバクテー

最後の朝は港の中央市場へ行き、水揚げされたばかりのサメや色鮮やかなチリなどが並ぶストールをひやかし歩き、シンガポールの市場とはまた違った雰囲気を楽しみました。サンダカン探検隊は、歴史の痕跡をたどるだけでなく、現在のサンダカンの自然や暮らしにも触れる旅となり、無事終了しました。



カラフルなチリ



市場で売られていたサメ魚



魚市場



筆者



サンダカン探検隊 (左から) 島田潤さん、ジョホール日本人会 油井美穂子事務局長、筆者、近藤明日香さん、本田智津絵さん